東京大学大学院総合文化研究科　グローバル地域研究機構付属中東地域研究センター
［スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座］

UTCMES ニューズレター

VOL.10　2017

1. ウィリアム・アンド・メアリー大学訪問 ・・・・・・・・1
2. 講演会報告記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
（1）諫早庸一「ズィージュのなかの中国暦：モンゴル帝国期ユーラシアにおける２つの天文学」
（2）武藤弘次「日本・サウジアラビア重層的互恵関係の構築への道のり：Vision 2030は新たな日サ関係の幕開けとなるか？」
（3）中西悠喜「ポスト・アヴィセンナ期のアラビア＝イスラム哲学史：哲学の受容と神学・神秘思想」
3. 現地調査報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
（1）保井啓志「イスラエルにおける性的少数者をめぐる政治」
（2）青木健「ホラズムのゾロアスター教遺跡調査（2016年８～９月）」
4. 文化をとおしてみる中東社会 ・・・・・・・・・・・・・8
（1）照井敬生「中東映画研究への文化政策学／文化産業学の応用可能性」
（2）愛甲恵子「詩の絵本展を企画して」
5. そのほかの便り ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
（1）ヌール・アル＝カースィミー氏来日
（2）中東地域研究センター付属図書室バフワーン文庫準備中
6. スタッフ・発行者情報 ・・・・・・・・・・・・・・・12

1. ウィリアム・アンド・メアリー大学訪問

東京大学大学院総合文化研究科　中東地域研究センター特任准教授
辻上奈美江

11月27日から29日にかけて、米ヴァージニア州ウィリアムズバーグにあるウィリアム・アンド・メアリー大学を訪問した。1693年に公認されたウィリアム・アンド・メアリー大学は、米国でカレッジとしては二番目に古い歴史を有する大学である（最古にあたるのはハーヴァード大学）。大学名は、イギリスのウィリアム３世とメアリー２世に敬意を表してつけられたものである。フォーブズによる「アメリカのトップカレッジ」で、ウィリアム・アンド・メアリー大学は2016年には第５位に選ばれており、伝統ある有名校である。

●ウィリアムズバーグについて

ヴァージニア州はワシントンDCの南隣に位置し、ウィリアムズバーグはワシントンDCから電車で３時間半かかる。電車は朝晩１往復ずつで、１日２往復しかしておらず、交通は必ずしも便利ではないものの、サンクスギヴィングの休暇から戻る学生たちで満席となっていた。

ウィリアムズバーグは、ウィリアム・アンド・メアリー大学以外にも深い歴史を有する場所で、ジェームズタウン、ヨークタウンとともに「歴史的な三角地帯」をなす。ウィリアムズバーグは植民地時代の17世紀末にヴァージニア州の州都となって栄えるが、その後州都はリッチモンドに移る。その後、ウィリアムズバーグは一時衰退していくものの、20世紀になるとロックフェラー家などの支援を得て、18世紀前半の時代を再現するための一大プロジェクトが始まった。現在「コロニアル・ウィリアムズバーグ」と呼ばれる場所では、約

18世紀当時の衣装を売る店

コロニアル地区には、星のない植民地時代の国旗が掲げられている

１マイルにわたって18世紀の建物や生活様式を再現している。「コロニアル・ウィリアムズバーグ」では、植民地時代の国旗が掲げられ、通りでは馬車が走り、店のスタッフもまるで18世紀にタイムスリップしたかのような服装で迎えてくれる。

●ウィリアム・アンド・メアリー大学スルタン・カブース中東研究寄附講座

ウィリアム・アンド・メアリー大学にも、2014年に東京大学と同様にスルタン・カブース中東研究寄附講座が創設された。講座の主任を務めるステファン・シーハイ准教授はレバノン系アメリカ人で、オスマン帝国末期の政治経済や、冷戦後のイスラモフォビアなど幅広い専門分野を有して

いる。

オマーン政府は、欧米、中東、アジアの複数の大学に同様の寄附講座を設けており、寄附講座間の学術交流を推進している。今回の訪問では、この取り組みの一環として、シーハイ准教授の授業で講演を行うとともに、一般向け講演を行なった。

一般向け講演では、サウジアラビアの女性が近代化とともに生産活動から退出していく過程と、他方で消費主義が高まった近年、消費とビジネスを通じて女性が新たに生産活動に参加し始めたことを紹介するとともに、女性たちが「男女隔離」を差別ではなくネットワークの源として活用していること、しかし男性が家族を扶養すべきというイスラームの伝統的言説の変更をできるだけ回避しながらこのような変化が起きていることを議論した。講演には、学生や教員40名ほどが参加し、活発な質疑応答を行うことができた。

また授業での講演では、日本の近代化と「脱亜入欧」的価値観が浸透していく過程と日本における中東に対する眼差しについて紹介した。ごく最近ではムスリムを対象にビジネスが展開される過程で、日本人のビジネス界においてムスリムやイスラームに対する誤った理解も広まりつつあることも論じた。

日常的に馬車が走るコロニアル地区

シーハイ准教授の研究では、中東研究の脱欧米化を提唱している。本招待講演は、日本における中東理解や中東研究の現状を発信することで、中東研究の脱欧米化の一助とすることも目的としていた。アメリカはイギリスなどと並んで中東研究の一大拠点であるが、だからこそ諸外国での中東研究の現状については無関心であることも多い。筆者は、かつて北米中東学会MESAに出席した際、高名なアメリカ人中東研究者から「日本にも中東研究を志す人がいるのか」と大いに驚かれた経験がある。「オリエンタリズム」には敏感なはずの研究者が、驚きのあまり自らのオリエンタリズムを惜しみなく表現した興味深い事例と言える。とはいえ、MESAへの日本人研究者の参加は、日本の大学の学期真っ只中という時期的な制約もあって、例年わずかな数に止まっているという問題も背景にある。今後もこのような活動を続けることで、微力ながらも中東研究の脱欧米化に貢献することができるのではないかと思っている。

歴史を感じさせるウィリアム・アンド・メアリー大学

2. 講演会報告記

（1）特別講演会

「ズィージュのなかの中国暦：モンゴル帝国期ユーラシアにおける２つの天文学」

日　時：2016年10月12日（水）
　　17:00-19:00
場　所：東京大学駒場キャンパス18号館
　　コラボレーションルーム３
講演者：諫早庸一（ヘブライ大学）

10月12日、ヘブライ大学にてモンゴル史プロジェクトの研究員を務める諫早庸一氏を招き、「ズィージュのなかの中国暦：モンゴル帝国期ユーラシアにおける２つの天文学」と題する講演会を開催した。

諫早氏は、モンゴル帝国期にかんして、イランを中心とする西方と東方中国地域の交流史を研究しており、とくに暦・時に焦点を当てた文化交流を論じた。氏は、『集史』の中国史、『珍奇の書』をはじめとするペルシア語史料と『金史』などの中国史料の双方を利用し、暦構造の重層性に注目しながら、中国の暦がイランの暦に与えた影響、相互交流を明らかにした。氏は、とくにズィージュとよばれるいわゆる天文便覧を詳しく分析し、このなかに、ムスリムの博学者とキタイの賢人の対話の形跡がみられると述べた。さらに諫早氏はこうした暦の分析を越えて、モンゴル帝国とは何か、という問題を、19世紀、20世紀、現在にいたる研究史の在り方を批判的に検証しながら、特に文化史的な観点から、新しい位置づけを議論した。

質疑においては、ズィージュの実態を詳しく問うものや、その起源に関する質問のほか、今回の話が、主として東方の天文知識が西方にもたらされたことが中心的な分析であったことから、西方から東方への文化移転の有無を問うものなど、興味深い議論が続いた。登壇者の最新の成果が盛り込まれており、有意義な講演会であった。

（文責：阿部尚史）

(2) 特別講演会

「日本・サウジアラビア重層的互恵関係の構築への道のり ～Vision 2030は新たな日サ関係の幕開けとなるか？～」

日　時：2016年12月7日（水）
　　15:00-16:30
場　所：東京大学駒場キャンパスI
　　18号館4階
　　コラボレーションルーム2
講演者：武藤弘次（一般財団法人 中東協力センター・主査）

12月7日、東京大学中東地域研究センターにおいて、筆者は「日本・サウジアラビア重層的互恵関係の構築への道のり～Vision 2030は新たな日サ関係の幕開けとなるか？～」と題する講演を行った。講演では、筆者が現在執筆中の博士論文（英エクセター大学）をもとに過去60年に亘る重層化した日サ関係の歴史を包括的に見ながらVision2030に代表される新たな経済イニシアティブを視野に入れながら今後の新たな関係について考察を試みた。なお、筆者は在サウジアラビア日本大使館専門調査員、一般財団法人中東協力センター駐在員（リヤド・ジェッダ）として2003年から複数回の駐在経験を有しており、日サ関係に係る外交・政治・経済・文化各分野における現地での自身の経験を交えた講演内容を発表すべく心掛けた。

講演では構成を二つに分け、前半に過去60年に亘る日サ関係の変遷を概観し、後半では筆者が独自に分析した経済関係の歴史を分ける四つの期間（第一期：日本の石油開発と石油危機、第二期：経済技術協力協定の締結と関係拡大、第三期：重層的互恵関係の拡大・深化、第四期：'技術経済'外交と安全保障への協力、追加として第五期：Vision 2030-投資立国シフトへの支援？）について配布資料を基に関連する写真等を提示しながら詳細説明を行った。また、講演でのメッセージを簡素化する目的で講演冒頭に次の結論を提示した。「Vision2030はサウジにおける経済改革プロセスの一環であり、過去にも同様の経済改革イニシアティブが提唱された経緯がある。日本（政府・企業）としてはこうした動きに過度な反応を示す必要はなく、過去60年に亘る重層化した日サ関係を冷静に分析し、実現可能で且つ経済的な観点から双方にとって有益となる事業を継続して展開することが望ましい」。本稿では講演で述べた四つの経済的発展期間について以下の通り説明する。

第一期：日本の石油開発と石油危機
　　1955－1975

日サ関係の基盤となる外交関係は1955年に樹立された。ここで重要なことは、外交関係樹立に至るプロセスが1938年東京で行われたイスラム教モスクのオープニングセレモニーに在英サウジ公使が参加したことから始まった、という歴史である。その後、1939年の在エジプト公使のサウジ公式訪問の際には地質学者が同行しており、日本の中東における初期石油開発という政治的要素はあったものの、「イスラムを起点とした外交関係樹立」と言う視点はアラブ・イスラム世界へ日本がアピールできる要素の一つである。この観点は後の日サ間の関係重層化の一部を成す文明間対話・異文化交流の原点となった。また、この時期はアラビア石油の中東における石油開発とその後に発生する最初の石油危機という、日本経済における中東地域の意義を改めて知らしめる事件が発生し、将来に向けた日本の中東政策の大きなかじ取りをする状況にあった。また、1971年には第三代ファイサル国王の来日も実現した。

第二期：経済技術協力協定の締結と関係拡大　1975－1990

日サ経済関係の第二期は石油危機への対応以降の日本の親アラブ的な中東政策に基づいて大きく前進した。その基盤となったのは1975年の経済技術協力協定の締結であり、この政府間協定に基づき日系企業のサウジ進出が加速した。他方、サウジ側から見れば、日本との経済技術協力協定の締結は、実は海外協力のパートナーの一つと言う認識であったことが伺える。サウジ総合投資院（SAGIA）のホームページによれば、1970年代初め頃から諸外国と経済、技術、貿易、投資に係る各協定が締結されている。また協定

締結先は近隣諸国や欧米だけでなく、韓国（74年）、マレーシア（75年）も含まれていた。この時期は英エクセター大ニブロック教授が指摘した1970年から85年にかけて見られた「サウジ政府が外国資本や技術を導入する形での国内経済開発計画を本格的に稼働させたPlanning for transformationの時期」に相当した。

第三期：重層的互恵関係の拡大・深化
　　1990－2010

第三期となる1990年代は、イラクのクウェート侵攻の影響で一時的な油価の高騰が見られたが、1980年代後半から続く油価の低迷期とも重なり、サウジ経済の構造改革の必要性、及び石油化学産業の多角化が強く叫ばれた時期でもあった。ニブロック教授は1985年から2000年までの15年間をConstrained Developmentと表現し、主に財政的要因からサウジ政府が実施する経済開発計画は限定的にならざるを得ない状況を指摘した。サウジ政府は、早い時期から石化産業以外の産業構造の多角化を目指し、国内経済の安定化、強いては統治正統性レジティマシーの保持を追求した。そうした中で、具体的な経済開発の策定や産業多角化の計画、国際競争力の確立等を実施するために、外国政府の協力や技術移転に強いこだわりを持つようになった。日サ関係の重層化の背景にはこうしたサウジ国内の厳しい経済状況があった。この時期はまた、日サ合弁事業の拡大、要人往訪の活発化、サウジ政府内（商工省、職業訓練公社、総合投資院等）への長期・短期人材派遣・交流の深化等が進んだ時期でもあった。また、2000年にはアラビア石油のカフジ油田利権交渉延長の失敗があった。

また、この期間における重要な経済交流

の出来事は、日本による３件の人材育成事業の実現であった。ジェッダにおける日本・サウジアラビア高等自動車研修所（SJAHI）、リヤドにおけるプラスチック加工高等研修所（HIPF）、及びサウジ電子機器・家電製品研修所（SEHAI）である。（SEHAIは筆者が同研修所立上げ期に関与しリヤドにも駐在した経緯があることから特別な思い入れがある。）SEHAIの特徴は入学と同時に日系企業への就職先を確定させる構想を作り上げたことであり、一般財団法人中東協力センターが組成した日本側作業グループに日本有数の技術系専門学校である日本工学院の協力が得られたことであった。SEHAIでの研修目的は電子家電製品の修理技術者を養成することであり、まずは「技術は面白いものだ」という学生の関心を高めることに注力し、日本式の「モノづくり」とは何か、そのためには何が必要か、という発想で取組んだ経緯がある。これは日本工学院の教育経験のノウハウであり、他研修所の機械操作・技術教育を主眼とした職業訓練プログラムとは教育哲学が異なっていた。日本経済新聞の取材ではSEHAIの取組みを「職業訓練に深みを与える（幅を持たせる）研修事業」と評された。日本側はこの思想をサウジ側パートナーや実際の授業を担当するインストラクター（インド人、フィリピン人）に理解してもらうために様々な努力を試み、日本研修という形でパナソニックの滋賀・草津にある松下商学院での研修等も取り入れた。2016年現在でSEHAI卒業生は374名になっており、サウジ人インストラクターも３名になっている。上記３研修所は、小規模ではあるものの着実な成果を残している人材育成事業であり、継続してゆくことが重要である。

第四期：‘技術経済’外交と安全保障への協力　2010−2015

第四期の日サ関係の特徴は、主に日本側の内政の変化が影響したことである。2009年以降の民主党政権と2011年の震災の影響、そして2012年の第二次安倍政権の誕生である。特に震災では日本のエネルギー政策に大きな影響を与えた。エネルギー安定供給という観点からは中東産油国との関係は今まで以上に重要性を帯びた。また、第二次安倍政権では中東産油国向けの積極的な外交が展開された。一定程度の成熟期を迎えた日サ関係の次の協力分野は、サウジ国内の省エネ分野及び防衛・セキュリティー産業での協力に向けられた。

第五期：Vision 2030- 投資立国シフトへの支援？　2015−

2015年以降のサルマン体制後のサウジ側の動きについては過去の慣例とは異なる抜本的な改革を目指すべく人事や省庁再編を実施した。また、2016年９月のムハンマド・ビン・サルマン副皇太子の来日を機に日本はサウド家次世代との関係構築に本格的に着手した。両国間の閣僚で構成される日サVision2030共同グループが設立され、同10月にはリヤドで閣僚級会合が開催された。同会合で、世耕経産大臣は「①サウジVision2030とアベノミクスのシナジー、②産業構造の転換に向けた協力の幅の拡大、③エネルギー分野の重層的な協力を軸とし、投資国家としての成長や国内産業の転換といったサウジアラビアが目指す姿の実現に協力して行く意志を表明」した。サウジ側パートナー閣僚は、ファキーフ経済企画大臣、カサビー商業投資大臣、ファーレフエネルギー・産業・鉱物資源大臣の３名であった。この新たな二国間関係は、いまのところ一定のフェーズは合っているものの、現実的に日本企業は何ができるか、経済性の面でも実施可能な事業を手掛けて行くことが肝要である。

（執筆：武藤弘次）

（3）特別講演会

「ポスト・アヴィセンナ期のアラビア＝イスラム哲学史：学知の受容と神学・神秘思想」

日　時：2016年12月14日（水）
17:00-19:00

場　所：東京大学駒場キャンパスI
18号館４階
コラボレーションルーム２

講演者：中西悠喜（テュービンゲン大学）

本講演は、アラビア＝イスラム哲学史をめぐる現行の研究を批判的に、一歩ないし半歩、乗り越えるための視座を提示するものであった。アラビア語圏の哲学の歴史に関しては、19世紀後半頃から現在に至るまでのおよそ一世紀半にわたる研究の蓄積がある。それはおおまかに次の３つの時期に区分される。

（1）19世紀後半頃〜20世紀前半：RenanやGoldziherらによって端緒が築かれた時代。ガザーリー（1111年没）による批判以降、アラビア語圏で哲学は基本的には凋落していくという歴史観をとる。西欧への影響力の有無にもとづいて哲学の意義を評価する傾向が強い。

（2）20世紀前半頃〜20世紀終盤：CorbinやNasrといったイラン学系の研究者が西欧への影響力の有無とは独立した探究を志向しだした時代。13世紀以後も、イブン＝アラビー（1240年没）やスフラワルディー（1191年没）のような神秘家たちのあいだで、哲学は広く受容されていた（そしてその極致がサファヴィー朝シーア派のモッラー・サドラー［1640年没］）という歴史観をとる。非歴史学的・非文献学的傾向が強い。

（3）21世紀初頭〜：EichnerやWisnovskyといったGraeco-Arabica研究とイスラム神学（kalām）研究の双方に関心をもつ（非イラン学系の）研究者が、第２期の研究がもつイラン学的バイアスや非歴史学的バイアスを修正しだした時代。13世紀以後、哲学は神秘家やシーア派のみにかぎらず、スンナ派の哲学者・神学者たちのあいだでも広く受容されていたという事実を明らかにした。第２期の研究同様、西欧への影響力の有無とは独立した探究を志向する傾向が強い。

現在のアラビア語圏における哲学史の研究は、主としてEichnerやWisnovskyといった第３期を代表する研究者たちによって進められている。彼らは第２期の研究がもつイラン学的・非歴史学的という２つのバイアスを修正し、スンナ派とシーア派の別を問わず、13世紀以後も哲学が広く受容されていたという事実を解明した。

しかし彼らは、この第２期の研究に見られるとりわけ非歴史学的傾向への反発からか、当時盛んに論じられた神秘家たちのあいだでの哲学受容についてあまり検証したがらない。哲学の影響がそこにもおよんでいた以上、哲学史を精確に叙述するためには、神秘家たちの側での哲学受容の諸相も、あくまで歴史学的手法にもとづき、詳細に分析される必要があると、私は考える。

以上の問題意識にもとづき、本講演ではまず第３期の研究を参照しつつ、アヴィセンナ（1037年没）以後の主として哲学者・神学者の側での哲学受容史を概観した。そしてその上で、特に13世紀以後の存在一性論派、あるいはイブン＝アラビー学派のあいだでの哲学受容の実態を、この時代を代表する３人の存在一性論者、カイサリー（1350年没）、イブン＝トゥルカ（1432年没）、ファナーリー（1431年没）の著作にもとづいて、やや細かめに見ていった（その詳細はここでは割愛するが、私のacademia.eduの個人ページ上に当日配布した資料の修正版がアップしてあるので、関心のある方にはそちらを参照していただきたい［http://bit.ly/2i3BlmH］）。これにより哲学が哲学者・神学者と神秘家の別を問わず[1]、13世紀以後も相当程度受容されていたことが、大まかには示せたと思う。

これにくわえ、本発表では補論として、試みに現行の哲学史研究を乗り越えるためのもう１つ別の視座も提示してみた。先述のとおり、研究史の第１期をのぞき、基本的にアラビア＝イスラム哲学史の研究は西欧への影響とは独立してなされる傾向にあった（そして現在もそうある）。これ自体は、それが「アラビア＝イスラム哲学史」研究である以上、当然のアプローチではある。けれども観方を変えれば、ここには「13世紀以後、アラビア語圏の哲学は西欧への影響力を失った」とする第１期の研究に顕著な歴史観が踏襲されているとも言えなくはない。このように第１期から第３期までの研究が暗黙裡に前提していた歴史観を相対化するようなテーマが近年、一部の研究者たちによって少しずつ検討されはじめている。

１つは征服者メフメト２世治下のオスマン朝における、ギリシアの学術への振興である。具体的には、この時期、アッリアノス『アレクサンドロスのアナバシス』のギリシア語写本や、トマス・アクィナス『対異教徒大全』のギリシア語訳（デメトリオス・キュドネス［1397/8年没］による）写本、そしてヘシオドス『神統記』の注釈付きギリシア語写本などが写字されている。さらにプトレマイオス『地理学』や、ゲミストス・プレトン（1452年没）『法律』の断片、および『カルデア人の神託注釈』の断片（いずれも神働術に関する箇所）などはアラビア語に訳されてもいる。なお私自身はその当否を判断しかねるが、プレトンに関しては一部の先行研究で存在一性論から影響を受けた可能性が指摘されている。「翻訳運動」というと、一般にはアッバース朝初期（９世紀頃）のそれが有名だが、この時期のオスマン朝でもギリシア語文書のアラビア語訳がなされていたのである。

もう１つはイタリア人文主義とマロン派カトリック信徒の関係である。16世紀、カトリック教会はいわゆる「対抗宗教改革」の一環として、当時中近東で唯一のカトリックだった、レバノンおよびキプロス在住のマロン派信徒に着目する。彼らはローマに招聘され、マロン派神学院で学究生活を送りながら、人文主義の成果を大いに吸収した。そして郷里に帰還したのち、ローマで学んだラテン語（ときにはスペイン語やイタリア語）の著作をアラビア語へと翻訳した。具体的には、イエズス会士コルネリウス・ア・ラピデによる聖書注釈や、トマス・アクィナス『神学大全』などがアラビア語に翻訳されたという。さらにサファヴィー朝のスンナ派弾圧政策により命を落としたマイブディー（1504/5年没）のペルシア語哲学著作『世界を映す杯』が、ハーキラーニー（1664年没）によって亜羅対訳版として、1641年パリで出版されたという事例も知られている。このように、アラビア語圏における哲学の受容、ならびにアラビア語圏から他の言語圏への哲学の伝播という側面も考慮すると、哲学史の地理的射程はポスト・アヴィセンナ期においても、必ずしも中近東内部のみ

にはかぎられないということがわかる。中近東と欧州とのあいだの知の交流は、少なくとも15世紀半ば以降もある程度は存続していた。そしてそこにポスト・アヴィセンナ期の哲学や存在一性論も、部分的には関わってくるようである。とすれば、今後は13世紀以後の歴史も欧州との影響関係を度外視せずに検討される必要があるだろう。

以上が本講演で示した、現行のアラビア＝イスラム哲学史研究を批判的に乗り越えるための２つの視座である。当日は予想していたよりもずっと多くの方が集まってくださり、質疑応答も盛況だった。記憶にあるかぎりでそれらを挙げれば、「プレトンのアラビア語訳の伝存する断片が神働術関連のみというのは何故か？ むしろいち早く焚書されそうな内容では？」「哲学『批判』者（ガザーリー）による哲学の『受容』などということが本当にありうるのか？」などの質問がよせられた（その他にもいくつかの質問をいただいたが、いずれも本報告書で割愛した詳細部分に関わるものなので、ここで紹介することは控えておく）。これらに対しては、それぞれ「管見のかぎり、プレトンの『法律』は完成後すぐに焚書されたが、完成前からその断片はすでに出回っていたようで、それ故たまたま焚書を逃れられたのかもしれない。ただ、そうした断片全てが神働術に関するものだったかは、わかりかねる」「ガザーリーに対する哲学の影響を重視するのは、私個人の牽強付会によるものではなく、現在世界的に主流の解釈である。本講演ではそれに従ったにすぎず、ガザーリー学者たちの議論の妥当性は私には判断できない」というように、答えたと記憶している。部分的に専門からはみ出す内容もあったため、要を得ない回答だったかもしれないが、それ

でも議論が盛り上がったのは発表者冥利につきる。準備段階では知りえなかった情報も得られ、非常に有意義な講演となった。

（執筆：中西悠喜）

1 もちろん存在一性論者のなかにも、同論の要素がほとんど見られない哲学的ないし神学的著作を残した者は多くいる（カイサリー、イブン＝トゥルカ、ファナーリーなどはその好例である）。そのため、そもそもこの「哲学者・神学者」か「神秘家」かという二分法自体が成り立たないのだが、私の議論の眼目はむしろ「本来そうした区別が必ずしもないにもかかわらず、あたかもあると認識しているかのように、歴史家たちは存在一性論系の著作を哲学史の枠内で扱ってこなかった」という点に存する。

3. 現地調査報告

（1）「イスラエルにおける性的少数者をめぐる政治」

東京大学大学院総合文化研究科修士課程
保井啓志

2016年8月から9月にかけて一か月弱の間、報告者は、修士論文執筆の調査の為にイスラエルを訪れた。本報告ではその際の経験を基に、イスラエルにおける性的少数者をめぐる政治について記すことにしたい。

イスラエルの性的少数者

今回の調査の主眼は、イスラエル国内にいる性的少数者（同性愛、両性愛、トランスジェンダー等の規範的でない性を生きる人々）の置かれた状況を把握することに置かれていた。そのため報告者はイスラエルのテル・アヴィヴのゲイ・センターと呼ばれる施設でインタビューを行った。イスラエルでは1990年代からこの30年余りで性的少数者に関する人権の擁護という点においていくつかの進展が見られている。1988年には非規範的な性行為を違法としたいわゆる「ソドミー法」が撤廃され、1992年には性的指向に基づく差別禁止法が制定された。1994年には非登録同棲制度が制定され同性カップルの権利が認められはじめた。1998年には、ハ・アグダという団体によってテル・アヴィヴで国内初となるテル・アヴィヴプライド（性的少数者の権利の向上を求めたデモ行進ことで、米国を中心に世界各地で行われている）が開催され、以後その開催地の増加や参加者の拡大を続けている。テル・アヴィヴプライドは今や20万人ほどの動員数を誇り、これはアジア大陸で行われるプライドの中では最大である。

テル・アヴィヴにあるゲイ・センター（撮影：報告者）

運動と国家・行政

イスラエルの性的少数者の置かれた状況の特徴は、国家や行政による包摂が積極的に行われている点である。イスラエル政府はテル・アヴィヴプライドに際しての海外からの観光に多くの広告宣伝費を投入している他、イスラエル国防軍は男性同士が手をつないでいる写真を自らのFacebookに掲載するなど、進歩的な軍隊であることを強調している。また、イスラエルのネタニヤフ首相は2009年に前述のハ・アグダの事務所に向けて銃乱射事件が起きた際に、このような事件は性的少数者に対する憎悪犯罪であり、明確なテロリズムであるとし、「イスラエル社会は性的少数者に対する寛容に向けて進歩を続けなければならない」という旨の声明を出した。中でもテル・アヴィヴ市は性的少数者、とりわけ同性愛者の包摂に積極的であり、前述のゲイ・センターは、テル・アヴィヴ市の出資・運営によって成り立っていたり、テル・アヴィヴ市の公式ホームページでは多様性や寛容の象徴として同性愛者の存在をアピールしている。

Is There Pride in Occupation?

イスラエル国内の性的少数者をめぐる運動を担ってきた団体は、上記のように政府機関や企業、多くの市民を含む形で大きな連帯を生み出し、様々な分野での権利擁護を達成してきた。しかしながらこれらの連帯の一方で分断が起きているのも見逃せないだろう。パレスチナ社会の性の多様性のために活動を行うAl-Qawsという団体は2016年に行われるテル・アヴィヴプライドに対しボイコットを呼びかけている。Al-Qawsによれば、テル・アヴィヴ市及びイスラエル政府はテル・アヴィヴを中東で唯一性的少数者に寛容な市として国際的に宣伝することを通じてイスラエルを「良い」国家であるイメージを作り出そうとしている。その点で言えば、テル・アヴィヴプライドは結果的にパレスチナにおける占領を正当化するための道具として政府に利用されているという。Al-Qawsのボイコットの呼びかけのキーワードは「占領にプライド（自身のセクシュアリティに対する誇り）はない」であり、占領と入植を推進するイスラエル右派政権との協力関係を続けるイスラエルの主流LGBT運動に対し、Al-Qawsは距離を置いている。

この問題は性的少数者の問題にかかわる人々の難問であり、一見して無関係と思

える人々も考えるべき課題でもある。性規範からの解放を求めている運動が、それのみを求めることだけでは、階級や人種、宗教、言語等様々な「違い」によって生きづらさを抱えている人々の問題を解決できないということである。その意味で言えば、イスラエル／パレスチナの事例によって見えてきたことは、「いったい誰がより良い生を生きることを許されているのか」という問いの難しさであるかもしれない。

(2) ホラズムのゾロアスター教遺跡調査（2016年8～9月）

東京大学大学院総合文化研究科
学術研究員
青木 健

筆者は、2016年8～9月に、古代のホラズムに当たるウズベキスタン共和国ホラズム州およびカラ・カルパクスタン自治共和国で、ゾロアスター教遺跡を調査する機会を得た。この一帯は、旧ソ連領中央アジアに属するものの、バクトリア（アフガニスタン北部とウズベキスタン南部）やソグディアナ（タジキスタン西部とウズベキスタン東部）のようにシルクロードの幹線上に位置しておらず、地理上は比較的孤立している。この為、シルクロードを介して中央アジアを見る習慣のある日本人にとっては、馴染みの薄い土地である。また、久しくロシア帝国領・旧ソ連領にあった為に、研究の蓄積はロシア語が主となっており、ロシア語の素養のない筆者にとっては、更に縁遠い土地であった。

しかし、ここはゾロアスター教の教祖ザラスシュトラ・スピターマ（紀元前1500～1200年頃に生存か？）の出身地且つ原始ゾロアスター教教団発祥の地の有力候補の１つである。（因みに、他にはバクトリア説とスィースターン説がある。）ゾロアスター教を研究している筆者にとって、ホラズムは長年憧れてきた壮麗の地である。今回、奈良県立橿原考古学研究所の調査隊に紛れ込ませて頂き、現地を訪問する機会に恵まれたことはアフラ・マズダーの神慮としか言いようがない。

管見の及ぶ限りで、日本語と英語で読める古代ホラズムの参考文献を挙げるとすると、下記の３冊が代表格ではないだろうか。

◇シルクロード学研究センター（編）、『古代ホラズムの研究：アムダリア下流部を中心として』、シルクロード学研究センター紀要、第２巻、1996年

◇V. N. Yagodin, A. V. G. Betts, *Ancient Khorezm,* UNESCO, 2006

◇Academy of Sciences of the Republic of Uzbekistan, *Guidebook: State Museum of the History of Uzbekistan,* Tashkent, 2013

これらに依拠して筆者が予習した範囲内では、ホラズムのゾロアスター教遺跡は、

① 現地で拝火神殿やダフマ（ゾロアスター教で用いられる曝葬用の施設）と推定されている幾つかの考古学遺跡

② ウズベキスタンの首都タシケント所在のウズベキスタン国立歴史博物館に収蔵されている幾つかの遺物

に大別される。

＊ ＊ ＊

とりあえず、①現地の調査から記す。タシケントからカラ・カルパクスタン自治共和国の首都ヌクスまで、1,300キロの距離を、スウェーデン製のプロペラ機で３時間かけて飛んだ。行けど進めどキジル・クム（トルコ語で「赤い砂」）の上空で、満目百里これ砂漠である。枯れ木に宿る鳥もなく、嘗てここに文明が栄えていたとは信じ難い。もちろん、この惨状は、旧ソ連がアム・ダリヤ川の水を全て綿花生産に注ぎ込んだ為に、アム・ダリヤ下流域で水資源が枯渇した所為である。現状から紀元前1500～1200年頃のザラスシュトラ・スピターマの時代を類推するのは現に慎むべきだが、「ゾロアスター教の原郷」にある種のロマンティシズムを抱いていた筆者にとっては衝撃的な光景であった。ザラスシュトラ在世当時のホラズムは緑綾なす豊饒の地だったと信じたい。

ホラズムで実見したのは、下記の３つの遺跡である。

◆**チリピック遺跡**……ヌクス市から南へ43キロ地点にある遺跡。直径65メートルの円形構造で、一般にはゾロアスター教のダフマ跡と言われている。

◆**トプラク・カラ遺跡**……クシャナ朝時代に当たる紀元２～３世紀のホラズム王の宮殿に比定される遺跡。ここからホラズム語の文書が発見されている。

◆**アヤズ・カラ遺跡**……３つの城塞の複合遺跡で、ホラズムでも最大級の規模を誇る。紀元前４世紀から築造が始まり、紀元後８世紀頃まで使用されたとされる。

チリピックは、アム・ダリヤ川に面した丘陵の上部を版築で加工した遺跡であった。遠望するとダフマに良く似ているが、ただそれだけで、実際のところダフマでないことは、考古学者ならぬ私にも容易に見分けがついた。これは、偶々イスラーム教徒による征服後のイランで一般化したタワー型のダフマの形状に似た姿で残った城塞遺跡だと思われる。

トプラク・カラ遺跡は、丘陵の上に造成された日干し煉瓦製の都市遺跡である。考古学の報告書によると、この一角に拝火神殿遺跡があったそうだが、全体が激しく崩壊しており、まるで粘土で捏ねた模造都市に水をかけて溶かしたような姿である。おそらく、アム・ダリヤ河の流水路が変わって放棄されて以来、全く手入れされず朽ちるに任されたのであろう。唐代の漢詩に「昔は楽遊の苑たるも今は狐兎の園たり」とある通りで、この中から古えの拝火神殿の位置を探し当てるのは到底不可能であった。

チリピック遺跡

トプラク・カラ遺跡

アヤズ・カラ遺跡は、ホラズム最大の遺跡だけあって、炎熱天下で外周を回るだけでも一苦労であった。全体的な状況はトプラク・カラ遺跡とほとんど変わらず。イラン人の民族宗教たるゾロアスター教は、普遍的な一神教であるイスラームに遂に勝てなかった。敗亡の資格に生きたゾロアスターの教えにとっては、相応しい舞台なのかも知れないが、研究者にとっては儘ならないことである。

これらの遺跡を実見した後でヒヴァに到着すると、初めて往時の都市国家の隆盛を偲ぶよすがが感じられた。ここだけは、アム・ダリヤ河の流水路から見捨てられなかったので、今でも機能しているのである。このイチャンカラの遺跡が生き残っているお陰で、ホラズムの幾多の廃墟はわびしさから免れている。

＊　＊　＊

続いて、②博物館調査について記す。ウズベキスタン歴史博物館２階の古代コーナーは甚だ充実しているのだが、特に以下の２つに絞る。

- **ホラズムの拝火遺跡（コイクリルガン）**……紀元前４世紀の城塞都市遺跡で、ゾロアスター教拝火神殿と葬祭殿が模型で示してあった。
- **サカ族の遺跡**……イラン系遊牧民族サカ族は、ウクライナ辺りに居るものとばかり思っていたら、案外にもウズベキスタンにも遺跡を残していると判明した。

即ち、ホラズムはシルクロード幹線上にない代わりに、遊牧民族であるサカ族との関係が深く、現地のゾロアスター教文化はサカ族文化に濃厚に影響されている。――少なくとも、旧ソ連やウズベキスタンの研究者たちがそのように理解していることは、これらの展示から汲み取れた。

＊　＊　＊

この旅の終わりの９月２日深夜、カザフスタンのアルマトイ空港で、中央アジア考古学の誇るべき大先達・加藤九祚氏に初めてお目に掛かった。完全な不期遭遇だった。偶然その場に居合わせた帝京大学の山内和也氏に御紹介頂いたのだが、94歳とご高齢の加藤氏が異国で一人旅をなさり、「これからウズベキスタンのテルメズに飛んで発掘調査をする」と仰っている姿には、学問に対する執念を感じた。それだけに、帰国後、「９月３日早朝テルメズに到着した加藤氏がそのまま倒れられ、９月11日にお亡くなりになった」との訃報を伺った時は愕然とした。謹んでご冥福をお祈りしたいと存じます。

4. 文化をとおしてみる中東社会

（1）中東映画研究への文化政策学／文化産業学の応用可能性

照井敬生

1. はじめに
ーそもそもなぜ映画なのかー

本稿の目的は、中東地域を舞台・題材とした映画について、その言説と研究を参照しつつ、映画作品研究および文化政策／文化産業研究の視座を用いることで新たな分析枠組みを提示することである。

議論を進めるにあたって、そもそも何故中東研究において映画に着目することが有用であるのかについて言及したい。第一の理由としては、映画というメディアが特定地域のイメージを形成する上で果たす役割の大きさが挙げられる。英国映画『アラビアのロレンス』が、（その偏りを批判されることになったにせよ）アラブ世界への関心を高める契機として非常に大きな役割を果たしたように[1]、今日に至るまで、国際社会の中で高い流通力とイメージ形成能力を有している。第二に、映画の大きな特性として「商品（commodity）であると同時に文化（art）である」[2]という経済的・文化的性格の両方を非常に強く有していることが挙げられる。それ故に、地域研究のツールとして映画を用いることで、中東地域の文化と経済の両側面について光を当てることが出来ると考えられる。以上のような映画というメディアの特徴を踏まえた上で、次節では文化産業／文化政策研究の分野で蓄積されてきた分析枠組みについて確認する。

2. 映画産業研究の分析枠組み

映画は他の芸術文化に比べて産業としての規模が大きいことから、その産業構造全体を把握する為の分析枠組みがしばしば議論されてきた。最も一般的な切り口としては、映画産業を「製作」「配給」「上映」という三段階で捉える方法論であり、代表的な映画研究においてもこの枠組みは採用されている。一方で、近年ではイギリスの映画支援実施機関であるBritish Film Institute（BFI）によるRe-defining the Independent Film Value Chainに見受けられるように、国際流通や消費、アーカイブ化といったより細かい動向を反映することで映画産業の複雑な構図をより精緻に捉えるための研究枠組みも提供されている。BFIによって提出されたこのレポートはインディペンデント映画を分析するための枠組みとして提示されたものであるが、中東映画を分析する上ではこの枠組みを用いるのが適切であると考える。その理由としては、第一に、中東映画産業においてはハリウッド映画をはじめ先進国の映画産業に見て取れるような大規模商業システムが見出しにくく、その点でインディペンデント映画に近い構造となっていること、第二に、中東映画は国際映画祭などを通じて興行や批評の対象として国際的に流通することが多々あることから、国内での上映に留まらずその後の国際流通や消費についても検討することが重

要であると考えられるためである。

ここまでは映画の産業としての側面に着目してきたが、同時に映画は政治の対象として非常に大きな存在であった。一例として、イランに着目してみると娯楽映画といえども政策介入の対象であり、検閲や指導といった形で絶えず政治権力の影響をこうむってきたことが分かる。「イラン映画とは政治と文化が結びつく場」[3]であり、中東映画を見る場合でも文化政策という視座を持つことは有益である。中東地域に限らず映画政策を見る場合、検閲や指導のような直接的・間接的な政治介入と補助金助成や税金控除といった直接的・間接的な経済介入が政府によってなされていることが研究されており、こうした観点を中東映画研究に持ち込むことで中東映画の舞台裏をより精緻に捉えられよう。

以上のように、文化産業研究で用いられる枠組みによって中東映画の国内外での産業構造について網羅的に捉えることが可能になることから、映画産業／映画政策研究の対象として中東映画は興味深い対象であることが分かる。これを受けて、映画産業／映画政策研究のフレームワークを用いることで見えてくる、中東映画の新たな分析箇所について次節で検討する。

3. 中東映画産業／映画政策研究の発展可能性

中東映画研究で今後研究されるべき論点について、以下で「製作部門外部」と「国際流通・国際評価」の二点に着目したうえで分析を行う。その際に、中東映画の実例として『これは映画ではない（英題：*This Is Not A Film*）』『少女は自転車に乗って（原題：*Wadjda*）』の二作品に着目して議論を行う。『これは映画ではない』はイラン人監督によるドキュメンタリー映画、『少女は自転車に乗って』はサウジアラビアを舞台にしたフィクション映画とそれぞれ性格が異なるものの、両作品共に中東地域の映画を取りまく政治経済について示唆的であると同時に、国際的に非常に高い評価を得て、広く流通した作品であることから、本稿における分析対象として選定した。各論点の検討に先立って両作品の概略を確認しておく。

『これは映画ではない』はイラン司法によって20年間映画製作を禁じられた映画作家ジャアファル・パナーヒーの生活を描いた作品であり、主役でもあるパナーヒーの映画への想いとそれを禁じる社会を描写することで映画製作に関するイランの抑圧的な制度を見て取ることが出来る作品であり、製作と上映を禁じられた監督によるものにも関わらずドバイ国際映画祭や国際シネフィル協会のドキュメンタリー賞を受賞し、カンヌ国際映画祭などでも上映されることとなった。[4]『少女は自転車に乗って』はサウジアラビアの女性監督ハイファー・アル＝マンスールによる作品であり、少女ワジダと彼女を取りまく女性たちの生活を描写することでサウジアラビアにおける女性抑圧を批判的な視点から描いた作品である。本作は、ドバイ国際映画祭で最優秀作品賞、オーストラリア映画批評家協会賞、British Film Institute Award ノミネートなど国際的な好評を勝ち得た作品であると評価することが出来る。[5]

3-1. 非製作部門への着目

中東映画政策研究において今後調査分析される点の一つとして、映画製作サイクルにおける非製作部門への注目が挙げられる。従来の中東映画研究においては、イラン映画における女性の表象と立場を分析したMinoo Derayehの "Depiction of Women in Iranian Cinema, 1970s to Present" のような優れた社会的分析があったが、これらはあくまで政府機関による製作への弾圧を描いたものであり、流通や消費については言及されていなかった。しかしながら、『これは映画ではない』の監督が置かれた立場のように、映画産業への政治的介入は製作部門に限定するものではなく、配給や上映にも及ぶものである。従って、映画産業を包括的に捉えた上で、従来見落とされてきた配給上映への検討が必要であり、加えるならば中東地域で国内映画が上映される場合、その客層がどのようなもので、どのような批評がなされているのか、といった観客研究も中東映画を包括的に捉える上で必要な視座であり、それらのテーマについては文化産業／文化政策研究といった政治学・経済学のディシプリンよりもむしろ現地調査に長けた地域研究によって実りある知見が提供されるものと考えられる。

3-2. 国際流通・国際評価への着目

従来の研究においては見落とされてきたものの、文化産業／文化政策研究のフレームワークを用いることで見えてくる研究領域として、「中東映画の国際的な流通・評価」が重要なものとして見出し得る。先の『これは映画ではない』や『少女は自転車に乗って』のような中東映画の作品群は対象とする地域について批判的な視座を提供することから、国内のみならず国際的にも関心や評価を勝ち取る可能性が大きいものであると言える。事実、両作品ともに国際映画祭において批評的な評価を得るとともに各国で上映され、その結果としてDVDが日本を含む世界市場で販売されるに至った。こうした現況を考える時、中東映画を国内での製作という観点から捉えるのではなく、また国際的な批評を独立した行為として捉えるのではなく、製作から国際的な流通・批評に至るまでの一連の流れとして捉えることで中東映画をより包括的に理解することが出来る。これによって、国内政治と対立して弾圧下に置かれうるような中東映画製作者を経済的に支えるものが何か、あるいは製作を動機付けるものは何か、といった観点から中東映画の在り方をより立体的に捉えることが可能となるためである。

更に、先述した中東映画の代表作は単に映画批評家の中だけで論じられているのではなく、外国の新聞メディアなどでも言及や評価がなされており、さらにはウェブメディアにおいて一般市民における作品に対する感想が多数公開されている今日の中東映画を取りまく国際的流通状況を踏まえると、そうした国際的な作品批評の言説も映画に関する中東研究のテーマとして検討に値すると思われる。

4. 結論

本稿では、映画を題材とした中東地域研究について論じることで、映画産業／映画政策研究の分野で他地域の映画を分析す

る為に用いられてきた枠組みが、中東研究において有用であることを示し、その上で、従来の地域研究としての中東映画研究の先行研究が見落としてきた「中東地域における非製作部門の研究可能性」と「中東映画の国際的な流通とそこで形成される言説の研究可能性」の二点について明らかにした。こうした論点そのものについて筆者は十分な分析が出来なかったが、この研究テーマについて文化政策／文化産業研究と中東地域研究の共同研究によって掘り下げられることは大きな意義があると考える。

〈参考文献〉
IMDbs『少女は自転車に乗って』受賞歴
<http://www.imdb.com/title/tt2258858/awards?ref_=tt_awd>

IMDbs『これは映画ではない』受賞歴
<http://www.imdb.com/title/tt1667905/awards?ref_=tt_awd>

(Riview of The Politics of Iranian Cinema: Film and Society in the Islamic Republic by Saeed Zeydabadi Nejad)
<http://www2.css.edu/app/depts/his/historyjournal/index.cfm?name=Review-of-The-Politics-of-Iranian-Cinema:-Film-and-society-in-the-Islamic-Republic-by-Saeed-Zeydabadi-Nejad&cat=7&art=283>

- Bloore, Peter, "Re-defining the Independent Film Value Chain", British Film Institute, 2009 <http://www.bfi.org.uk/sites/bfi.org.uk/files/downloads/redefining-the-independent-film-value-chain.pdf>

- Minoo Derayeh, “Depiction of Women in Iranian Cinema, 1970s to Present”, Women’s Studies International Forum, 2010, 33(3), 151-8, May 2010

- Bradshaw, Peter, "This Is Not a Film-review", The Guardian 29 March 2012 <https://www.theguardian.com/film/2012/mar/29/this-is-not-a-film-review>

- Scott, A. O., "Silly Girl, You Want to Race a Boy? Haifaa al-Mansour's 'Wadjda': A Saudi Girl's Discoveries" New York Times 12 September 2013 <http://www.nytimes.com/2013/09/13/movies/haifaa-al-mansours-wadjda-a-saudi-girls-discoveries.html?_r=0>

---

1 外務省HP「映画で見る中東」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/dpr/page23_000789.html>
2 Albert Moran eds., Film Policy : International, National and Regional Perspectives(London ; New York : Routledge, 1996) なお、多様な地域の映画政策を扱った本書において中東地域は研究対象として等閑視されていることは着目に値する。
3 http://www2.css.edu/app/depts/his/historyjournal/index.cfm?name=Review-of-The-Politics-of-Iranian-Cinema:-Film-and-society-in-the-Islamic-Republic-by-Saeed-Zeydabadi-Nejad&cat=7&art=283
4 http://www.imdb.com/title/tt1667905/awards?ref_=tt_awd
5 http://www.imdb.com/title/tt2258858/awards?ref_=tt_awd

(2)「詩の絵本展を企画して」

サラーム・サラーム主宰
ペルシア語絵本翻訳家
愛甲恵子

サラーム・サラームという名で美術家の藤田夢香とともにイランの絵本やイラストレーターの紹介を始めて丸12年が過ぎた。ご縁のあった全国様々な場所でイラストレーターの個展や絵本展を企画し、日本語のあらすじや抄訳とともにイランの絵本を展示する、ということを続けている。だが、多くの人にイランの絵本のおもしろさを伝えられているという自負がある一方、その特徴と言える「詩的」という部分が「わかりにくい」「難しい」という印象につながって、絵本として高く評価されない状況があることが気になっている。確かにイランの絵本には、結論がはっきりしないお話や、そもそもお話自体がまさに詩のような、つまり、物語の筋で読者をひっぱるというよりも言葉自体が醸し出す雰囲気を楽しむ絵本が、日本の絵本よりは多いと思う。さらに、お話を共に物語っているはずの絵もあまりに「自由」なために、それだけではお話を想像できない絵本もこれまた多い。そういった特徴に対して、肯定、否定、両方の評価があることは致し方ないとずっと思ってきたのだが、最近少し変わってきた。より多くの人にイランの絵本を楽しんでもらうためには、「詩はわかりにくい」というイメージを少しでも軽減するための工夫をしていく必要があるのかもしれない、と考えるようになったのだ。とはいうものの、すぐに妙案は浮かばない……、ひとまず出した答えが「詩の絵本展」だった。とにかく見てもらおうという、工夫もなにも、直球の企画だったが。

いろいろな誌絵本

「詩にまつわる絵本たち」と題された展覧会は、2016年7月に東京板橋のPatinaというカフェギャラリーで開催された。その名のとおり詩にまつわる絵本と絵を展示する展覧会である。

この展覧会では、以下のような絵本を「詩にまつわる絵本」として展示した。

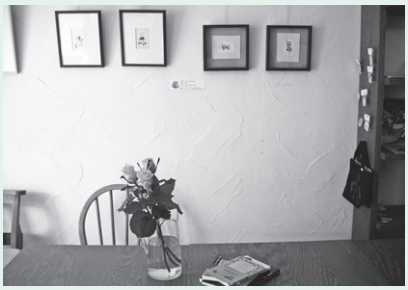
1、一編一編の詩に絵が添えられたいわゆる「詩絵本」

2、フェルドウスィーの『シャーナーメ（王書）』やルーミーの『精神的マスナヴィー』など古典詩に題材をとった絵本

3、詩人が散文の物語を書いている絵本（特に現代詩人アフマドレザー・アフマディの作品を中心に）。

どのカテゴリーの絵本もこれまで紹介してこなかったわけではないのだが、まとめて展示したのは初めてのことだった。特に1として挙げた「詩絵本」は、イランの絵本界において確固たるージャンルを築いているにもかかわらず、翻訳者（つまりわたし）が抄訳作りをサボっていたために、イランの絵本市場で出回っている数に比して紹介された絵本はごく限られていた。在庫には日の目を見ていない詩絵本がたまっていたのだ。それを一挙に出すと決心し、抄訳作りに励んだのだが、まとめて取り組んだことで改めて気づいたことがあった。それは、「詩絵本」というものの根本的な性質が、いかにイランの絵本の全体的な特徴を象徴しているか、ということだ。詩絵本にでてくる詩はほぼその見開き1ページで完結する。ページをまたいで続くことはほとんどない。絵もその詩のためだけの1枚なので、言ってみればページごとに世界が完結する。そのまま本を閉じたり、もう一度前に戻っても一向にかまわない。一冊を貫くテーマのようなものはあるにはあるが、非常にゆるやかで意識されなくても問題ない。つまり、詩絵本というのは、詩人と画家が生み出す渾身の一ページを束ねたものであって、読者は、一冊を読み通して何かを理解する、というよりも、ページごとの世界をそれぞれ楽しむ感覚が強い。

詩絵本が持つこういった特徴は、特に強調するようなことでもないごく当たり前



展示の様子

のことだ。しかしこのような本がイランでは多く作られ、読まれている、という状況を意識しながら他の物語絵本を読んでみると、先に挙げた否定的に見られがちな要素の一つである、絵が必要以上に「自由」で、絵相互に「流れ」があまり感じられないことの理由が見えてくる気がするのである。ポイントはやはり「詩」。詩という、元来音とリズムで楽しまれる、ある意味刹那的な文学表現が高度に発達したペルシア文学世界においては、物語絵本のような、ある一定の時間の幅と流れを持ったお話を複数の絵で表現しようとする時でも、一瞬一瞬（一枚一枚）をどれだけ美しく切り取れるかということが何よりも重視されているように思われるのだ。だから一見物語に関係のないものであっても、その画面に必要と思えば付け加えることにためらいがないし、前後のページとの関連性をそれほど気にしない。結果としてそれは、物語としての流れを感じにくい絵本になる。日本ではこういった絵本が「流れのない理解しづらい絵本」と評価されがちなのだが、作っている人たちが「流れ」よりも一枚の完成度を重視しているのだから当然といえば当然なのだ。イランの絵本は、ページ一枚一枚をじっくりと眺めて、物語に対する画家の捉え方を楽しむというのが鑑賞のコツなのだと、詩絵本をたくさん味わった末にようやく気がついた。

ちなみにイランの絵本は、小学校の高学年や中学生向けに作られているものも多い。日本では、絵本は小学校の低学年くらいまでというイメージがあるので、そのこともイランの絵本は難しいと捉えられる一因になっていると思う。「小さな子どもが読むものなのに、なんでこんなに絵も内容も難しいのだろう」と。絵本が誰に向けて作られているかということが問題にされるべきかどうかは別にして、イランでは、日本でイメージされる以上の年齢の子どもたちを想定した絵本も多く作られている、ということは折に触れて伝えていきたい。

ところで、「詩にまつわる絵本展」では会期中に一つイベントを行った。「自分の声で楽しむルバイヤート」と題されたもので、日本で最も知られているペルシア詩であろうハイヤームの四行詩「ルバーイー」を声に出してみよう、というイベントだ。これまで朗読会のような形でネイティヴのペルシア語を聞くイベントは多く開催してきたが、ペルシア語を参加者に発音してもらうのは初めて。ペルシア詩が持つ音の流麗さとリズムを、聞くだけでなく、自分で発音することで感じてもらえたら、と企画した。会場の都合で定員は15名ほどであったが、予想に反して予約はすぐに埋まり、ペルシア語を知っている人知らない人、様々な経歴の方が参加してくださった。この企画の意図がどれほど達成されたかはわからないが、ペルシア語の詩を、翻訳された日本語を読むという方法だけでなく、もっと別の方向から楽しんでみたい、という意欲を持った人が集まった、とても興味深い時間となった。

わたし自身イランの詩や絵本をもっと楽しみたいという気持ちがある。そしてそのおもしろさをなるべく伝えられたらと思う（それが詩に対するイメージの変化にもつながると信じるので……）。これからも絵本の展示やイベントを続けていくつもりだが、翻訳の力を高める努力はもちろん、伝え方を様々に模索しながら、詩と絵本の魅力を多くの人と分かち合えたら、と思っている。

イベントの様子

5. そのほかの便り

(1) ヌール・アル=カースィミー氏来日

2016年秋学期、英国エクセター大学名誉研究員のヌール・アル=カースィミー氏が客員研究員として本センターにて研究活動を行いました。11月21日（月）に、教養学部の1,2年生を対象とした全学自由研究ゼミナールにて、"Female Rehabilitation Home in Sharjah: Note from the Field"と題する講義を行いました。この講義では、ご自身のフィールドにもとづく調査研究をもとにしており、シャルジャにおける、「非行少女」を対象とした（当局の解釈を強く反映した）「イスラーム」の再教育と「女性」性の強調が行われている実態を説明し、その内容を批判的に分析しました。参加学生全員が発言し議論する機会を与えられ、充実した講義となりました。

(2) 中東地域研究センター付属図書室 バフワーン文庫準備中

このたび、オマーン国の実業家ムハンマド・ビン・サウード・バフワーン氏の寄付を受け、本センターは付属図書室「バフワーン文庫」を設置することになりました。2017年度中に本格的な活動を開始したいと考えております。近日中に詳細をご報告いたします。

寄付者のムハンマド・バフワーン氏と
本センター客員教授森元誠二氏

●UTCMES スタッフ紹介　（平成29年3月31日現在）

〈スタッフ〉

杉田　英明（センター長、兼務教授）
森元　誠二（客員教授）
辻上　奈美江（特任准教授）
瀬口　美加（事務補佐員）
長澤　榮治（副センター長、兼務教授）
高橋　英海（兼務教授）
阿部　尚史（特任助教）

〈UTCMES運営委員〉

杉田　英明（委員長、大学院総合文化研究科教授）
長澤　榮治（東洋文化研究所教授）
石田　　淳（大学院総合文化研究科教授）
菊地　達也（大学院人文社会系研究科准教授）
羽田　　正（理事・副学長、東洋文化研究所教授）
矢口　祐人（大学院総合文化研究科教授）
高橋　英海（大学院総合文化研究科教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

杉田　英明（委員長）
西崎　文子（大学院総合文化研究科教授、グローバル地域研究機構長）
矢口　祐人
石田　　淳
松尾　基之（大学院総合文化研究科教授）
高橋　英海

●発行者情報　UTCMESニューズレター VOL.10　平成29年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒153-8902　東京都目黒区駒場3-8-1　TEL：03-5465-7724　FAX：03-5454-6441
http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/

印刷：JTB印刷株式会社
〒140-0004　東京都品川区南品川5-2-10　TEL：03-5715-0900　FAX：03-5715-0909